

案

牧之原市学校再編計画(素案)

～魅力ある新しい学校を目指して～(仮題)

令和〇年〇月

牧之原市学校再編計画策定委員会

牧之原市学校再編計画（素案）～魅力ある新しい学校を目指して～（仮題）

I 目的

II 学校再編計画の基本方針等

- 1 目指す学校像「みんなの学校」
- 2 目指す学校づくりのための5つの基本方針
- 3 学校再編の考え方
 - (1) 学校規模
 - (2) 学校区（学校数）
 - (3) 学校の形態
 - (4) 学校の場所
 - (5) 開校の時期

I 目的

牧之原市で育つ子どもたちの望ましい教育環境を整えるため、市内全域の小学校、中学校を対象にした学校の再編について、学校区や学校の場所等、必要な事項を計画素案としてまとめます。

II 学校再編計画の基本方針等

1 目指す学校像「みんなの学校」

子どもたちが楽しい学校生活を送り、「次代を切り拓く力」を育むため、みんなで子どもを育てる「共育(きょういく)」を実現する「みんなの学校」を目指します。

【説明】

新しい学校は、子どもたちが楽しく、毎日通いたいと思えるものになってほしいと思います。学びと育ちをさらに充実させるために、教員だけでなく、地域や企業等多様な人が関わる「共育(きょういく)」を実現するとともに、大人も学び、活動できる場がある「みんなの学校」になることを望みます。

2 目指す学校づくりのための5つの基本方針

目指す学校像を実現するために、次の5つの基本方針を掲げます。

1. すべての子どもが主役の学校
2. 「次代を切り拓く力」を育む学校
3. 安心・安全な学校
4. 地域の未来を担う子どもを育てる学校
5. 働きやすく充実した指導ができる学校

● 各基本方針の説明

1. すべての子どもが主役の学校

すべての子どもにとって、学びやすく活動しやすい教育環境を、子ども主体で考えます。

【説明】

すべての子どもにとって、学びやすく、生活しやすく、「学校が楽しい」と思える学校にすることが大切です。

たくさんの友だちや先生、地域の人と交流し、興味を持てる分野や活動と出会ったり、自分の特性を発見し、挑戦することに楽しさを見出したりするなど、自分なりの学びや楽しさを体験できる学校になってほしいと思います。

そのためには、特別な支援や日本語指導なども含め、子どものそれぞれの特性に応じたきめ細やかな対応ができるように、サポート体制を充実させることも必要です。行政だけでなく関係する全員が子ども主体の視点から、新しい学校づくりを一緒に進めていくことを望みます。

2. 「次代を切り拓く力」を育む学校

一人一人の可能性を伸ばし、次代を切り拓くために必要な人間力を育むことができる環境をつくります。

【説明】

変化の激しい社会の中で、一人一人の可能性を伸ばし、次代を切り拓くために必要な人間力を育成していくためには、日常的かつ継続的に、多様な他者と関わりながら、さまざまな体験を通して学ぶことが大切だと考えます。

新しい学校には、キャリア教育やICT教育、外国語教育等の新しい教育、その他さまざまな社会変化に柔軟に対応ができる充実した教育環境を整えることを望みます。人や予算を集中させることで、新しい学校の運営や指導がより充実したものとなると考えます。

また、小学校と中学校を区切らず、義務教育9年間で系統立てた教育を行うことができる小中一貫教育を実施するため、学校の形態は、小中一貫校（義務教育学校含む）として整備することが望ましいと考えます。

3. 安心・安全な学校

児童・生徒、教職員等が安心して学校生活を送れるよう、市民にとって最も不安な自然災害である津波の浸水想定区域外に、自然災害に強い学校施設をつくります。

【説明】

子どもたちや教職員は、平日の多くの時間を学校で過ごします。そのため、新しい学校は、津波浸水想定区域外で他の自然災害にも強い安全な場所とし、防災機能の充実を図るべきと考えます。そして、施設は、構造だけでなく非構造部分も含めた安全性に加え、居住性や機能性、柔軟性も持ち合わせた長期的に管理がしやすい施設とすることを望みます。さらに、防犯や感染症対策のしやすさ等の配慮も大切です。

また、学校の敷地内の施設だけでなく、子どもと保護者が安心して通い、通わせることができる通学手段や通学路等を整える必要があります。

4. 地域の未来を担う子どもを育てる学校

地域の人に関わり、地域の資源や行事を通じて、子どもたちが地域愛を育むことができ、学校がみんなの場所となるようにします。

【説明】

自分の地域を知り、地域の人と関わることにより、子どもたちは、地域愛を育むことができます。それは、地域の未来を担う子どもたちにとって大切なことです。これからの学校は、児童生徒と教職員だけでなく、子どもの育ちや学びに関わるすべての人に愛され、地域活動の場となるものであってほしいと思います。

牧之原市では、昨年度からコミュニティ・スクールを導入し、地域、家庭、学校がみんなで子どもを育てる取組をしています。この取組が新しい学校にも生かされ、さらに充実したものとなることを望みます。

そして、新しい学校には、地域の人が活動や交流する場所があり、いつでも学校に来ることができる環境を整備することが必要だと考えます。

5. 働きやすく充実した指導ができる学校

教職員が働きやすく、充実した指導ができる組織体制と施設環境を整備します。

【説明】

学校は、子どもたちの学ぶ場所であると同時に教職員の働く場所でもあります。新しい学校では、授業を行う教室だけでなく、職員室や準備室等においても、教職員がより効果的・効率的に授業の準備や研修、さまざまな校務等を行うことができるような機能を充実させる必要があります。

また、継続性・安定性のある小中一貫教育に取り組むため、小・中学校段階の教職員の一体性を促し、一貫教育に適合した学校マネジメントを可能とする施設環境を確保することを望みます。

【目指す学校像概念図】

目指す学校像
「みんなの学校」

- 子どもたちが「学校が楽しい！」と思える子ども主体の学校
- みんなで子どもを育てる「共育」の学校

①学校、地域、家庭のみんな子どもを育てる、関わるみんなも育つ ②みんなが行きたくなる、みんなが活動できる

育みたい力

次代を切り拓く力＝人間力 (主体性・社会性・気付き力・コミュニケーション力等)

小中一貫教育

コミュニティ・スクール

キーワードは「つなぐ」

9年間のつながりある
学びと育ち

- ・ 小学校と中学校が同じ狙いを持ち、お互いの授業を意識することでよりよい学びにする（一貫した指導）
- ・ 「できた・分かった」輝く子ども
- ・ 着実なステップアップ ゆるやかな段差によるバランスのよい育ち
- ・ 教科専門性への対応

多様な人との交流

- ・ たくましさ・自己肯定感
- ・ 切磋琢磨できる環境
- ・ 一定の集団（クラス替えができる規模）の中で違う考えの人と触れ合い自分の生き方を見つめる
- ・ 異学年、地域といった多様な年齢や立場の人と触れることでさまざまな考え方を学ぶ
- ・ インクルーシブ教育

いろいろな体験

- ・ 授業の学びと実体験・実社会をつなぐ
- ・ 牧之原だからできるリアル体験を大切に
- ・ 地域・家庭・学校と一緒に子どもたちに地域愛を育む

キャリア教育

時代が変わっても教育内容、ライフスタイルに柔軟に対応できる施設・設備

特別教室の位置	広い廊下
可動式仕切り	50年後も使える仕様など

愛される施設

・つくり手と使い手が一体となった施設
・魅力ある環境

教育活動を支える施設の機能

ICT環境	ユニバーサルデザイン
木のぬくもり	地域と共有できる機能
共同職員室・たくさんのスタッフがいる広さ	
メンテナンスのしやすさ	エコスクール など

土台・基礎となるもの

安心・安全

- 災害に強い（場所と建物）
- 適正な管理ができる規模と質（限られた人とお金・後世に不安を残さない）
- 通学も安心（通学路と通学手段）
- 見える学校（目が届く・たくさんの目で見える）
- 保健衛生環境が整っている（感染症対策がしやすい）

3 学校再編の考え方

(1) 学校規模

新しい小中一貫校は、長期的に単学級にならない人数と規模を保障できるように、開校時の規模は、1学年3学級以上を基本とします。

【説明】

一人一人の多面的・多角的な思考力・判断力・表現力等これからの時代に必要な人間力を伸ばすためには、集団の中で多くの人と共に考え合い、理解し合い、切磋琢磨することが大切です。それにより、自分らしい生き方を見出すことができるようになると考えます。そのための環境としては、一定以上の集団規模が必要であり、クラス替えにより、より多くの子どもたちと触れ合う機会を得ることができると考えます。

(2) 学校区（学校数）

① 牧之原市立の学校について

新しい学校区は、相良地域の小・中学校を合わせて1校、榛原地域の小・中学校を合わせて1校の小中一貫校として再編することを基本とします。

【説明】

新しい小中一貫校は、開校時の規模を1学年3学級以上とすることで、長期的に単学級にならない人数と規模とし、教育委員会が進める小中一貫教育を充実させます。

さらに、地域とのつながりや地域性を継承できる範囲として、相良地域、榛原地域としました。新しい学校区にある小・中学校が段階的に連携・協力をし、開校時までには共通の取組や各種交流などを通して、一体感を育ててくれることを期待します。

なお、相良地域、榛原地域に1校ずつの小中一貫校にした場合、開校目標の2030年の児童生徒数の予測から、1学年のクラス数は3～4クラスとなり、適正規模となります。また、少なくとも建設後20年間は、複数学級が維持できる予測となっています。

② 御前崎市牧之原市学校組合について

地頭方地区の児童・生徒は、相良地域の小中一貫校に通うことを前提に御前崎市と協議を進めるものとします。

【説明】

地頭方地区の子どもは、牧之原市立の地頭方小学校に通っていますが、中学校は、御前崎市牧之原市学校組合立の御前崎中学校に通っています。地頭方地区での意見交換会では相良地域の学校に通う案について、賛成意見が多くありました。理由としては、小学校の立地の不安や、小学校と中学校の学校管理者が変わることによる不整合等が解消されることなどが挙げられました。一方で、相良地域に通う場合の通学への不安の声もありました。

教育委員会には、地頭方地区の児童生徒が相良地域の小中一貫校に通うことを前提に、御前崎市との協議を進めることを望みます。また、再編の時期や方法について十分協議するとともに、当事者となる児童生徒や保護者の意見を聴いて進めていただきたいと思います。

③ 牧之原市菊川市学校組合について

牧之原小・中学校区を今回の再編対象とするかについては、引き続き、教育委員会において検討し、総合的に判断するものとします。

【説明】

牧之原小・中学校区は、保育園、小学校、中学校が隣接した学校組合であり、高台開発の計画がある地域です。一方で、小学校、中学校ともに単学級であり、校舎も老朽化している現状があります。学校再編計画策定委員会では、再編すべきとの意見と、今後数年間の状況を見て判断すべきとの両方の意見がありました。そのため、人口の動向等を踏まえ、再編の対象とするかについては、教育委員会の総合的判断に委ねるものとします。

再編対象とする場合は、牧之原小・中学校区の全員が同じ学校に通うのか、それぞれ近い学校に通うのか等、協議する必要があります。再編対象としない場合については、現在の場所で、単独の小中一貫校とする一方で、児童生徒数等については一定の判断基準を設け、必要に応じて学校規模の適正化を図ることも視野に入れる必要があると考えます。どちらの場合においても、子どもたちにとって最良の選択となることを求めます。

【学校区】

校種	管理者	牧之原市立	牧之原市菊川市 学校組合立	牧之原市立	御前崎市牧之原市 学校組合立
中学校 (3学年)		榛原中学校 (565人・18学級)	牧之原中学校 (65人・3学級)	相良中学校 (398人・12学級)	(御前崎中学校) (371人・12学級)
	小学校 (6学年)	川崎小学校 (421人・16学級)	牧之原小学校 (173人・7学級)	相良小学校 (491人・17学級)	地頭方小学校 (192人・6学級)
細江小学校 (416人・14学級)		引き継ぎ検討 ↓	菅山小学校 (159人・6学級)	※児童生徒数及び 学級数は令和2年 5月現在のもの	
勝間田小学校 (139人・6学級)			萩間小学校 (149人・6学級)		
坂部小学校 (113人・6学級)					
新小中一貫校 (9学年)		榛原地域 小中一貫校 (1,178人・36学級)	相良地域 小中一貫校 (878人・27学級)		
		※2030年時点の児童生徒 の推計人数			

(3) 学校の形態

学校施設の形態は、施設一体型校舎とします。ただし、校種については、別に検討し、学校再編計画の策定の際には校種を定めるものとします。

【説明】

今回の再編については、学校の敷地を同一とした施設一体型校舎をつくることを提案します。校種とは、小学校、中学校、義務教育学校など、学校の種類のことです。小中一貫校を、小中一貫型小学校・中学校（併設型）として整備するか、9年間を1つとした義務教育学校として整備するかについては、教職員組織体制に関わる部分が多いことから、教職員の研究を経て、最終的には、教育委員会が判断し、学校再編計画において定めていただきたいと思います。

校舎の配置等については、決定した校種を踏まえて、学校再編計画策定後に新しい学校ごとでつくる「学校施設整備基本構想」において検討して決定するものとします。

(4) 学校の場所

① 校地選定の考え方

児童・生徒が安心して学べることを最優先とし、災害に対して安全な施設とすることが重要だと考えます。そのため、校地選定には、次の条件・視点を押さえるものとします。

1. 津波浸水想定区域外で、災害に強い施設が建てられること。
2. 児童・生徒の通いやすさを考慮し、できるだけ多くの児童生徒が、徒歩または自転車で通うことができる場所とすること。
3. 学校周辺の道路やインフラ等の状況を踏まえ、関係部署と連携を図り、都市計画等の他計画との融合を図って校地を選定すること。

【説明】

校地選定に当たっては、子どもたちの命を守り、安心して学校生活を送ることができる場所に学校を建てることを最重要事項と考えます。津波浸水想定区域外であることを条件とし、各種災害等に対しても安全な施設が建てられる場所とすることで、子どもも保護者も安心して通うことができる学校になると考えます。

次に、子どもたちの通いやすさを大切に、できる限り多くの児童生徒が、徒歩または自転車で通うことができる場所であることが大切です。学校区の広さから見ると、スクールバスでの通学者も多くなり、バスの台数が多くなることが想定されるため、周辺の道路状況等も考慮する必要があります。

また、市の都市計画と関係する可能性があるため、校地選定の際には、関係部署と連携を図り、選定することを求めます。さらに、電気、ガス、水道などのインフラがある程度整備されている土地とすることが、費用の節約や工期短縮につながると考えます。

② 選定したエリア

校地選定の考え方に基づき、学校の場所をエリア選定します。

1. 榛原地域については、榛原中学校からぐりんぱる周辺
2. 相良地域については、相良総合センター「い～ら」から相良総合グラウンド周辺

【説明】

榛原地域については、榛原中学校周辺は、津波浸水想定区域外であり、現在、中学生が通っている場所と変更がなく、各小学校から見ても中心に近い距離にあります。また、ぐりんぱるは、広いグラウンドが整備されているため、この周辺エリアを選定しました。

相良地域については、現在の相良中学校周辺は津波浸水想定区域となっているため、市街地に近く、かつ津波浸水想定区域外である相良総合センター「い〜ら」から相良総合グラウンド周辺エリアを選定しました。

教育委員会は、選定したエリア内の候補地について、必要な調査・調整を行い、学校を建設するのに最も適している場所を総合的に判断し、校地を選定してください。選定したエリアについては、各種調査等の状況により、必要に応じて変更はできるものとします。

(5) 開校の時期

令和 12 年度（2030 年）度までの開校を目指すものとします。

【説明】

災害に強く、教育活動がより充実する施設をできる限り早くに整備することが、子どもたちの安心・安全の確保と学びの充実につながるとともに、牧之原市に住みたいと思う人を増やす魅力の 1 つとなると考えます。

そのため、令和 12 年度までの開校を目標に整備をしていただくことを望みます。

【選定したエリアの地図】

